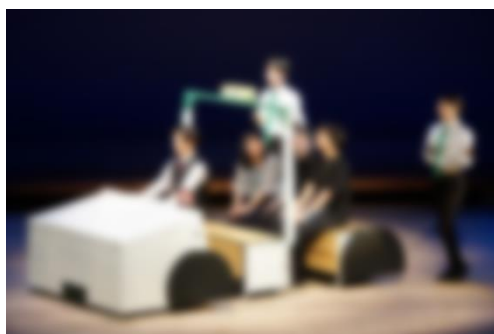


第74回全道高等学校演劇発表大会 in 小樽「運河きらめくオタルナイ大会」

上演番号7番 北海道網走南ヶ丘高等学校（オホーツク支部）

「はしれ、たぐしい！」 作：網走南ヶ丘高校演劇部・新井 繁

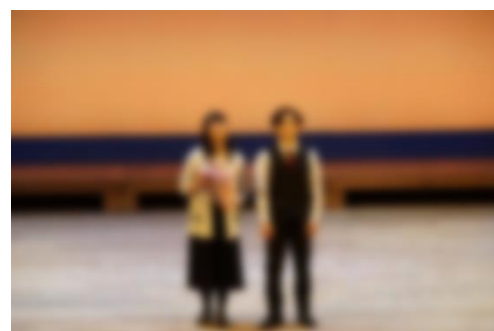
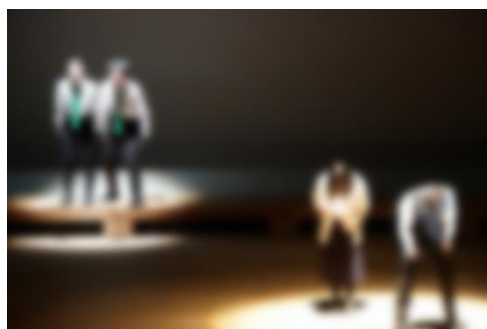
この劇は、全体として物静かで人物の心情を深く表現している印象であった。題材となっている夢破れ、タクシー運転手として懸命に働く青年「拓志」。そして、彼の相棒であり擬人化されたタクシー。本作は、拓志とタクシーがさまざまな客と出会い、時を重ねていく中で紡がれる、彼らの人生と絆の物語である。これは拓志の人生の物語であると同時に、タクシー自身の物語でもあったと感じた。



彼のタクシーに乗り込む客は、家出をした少女、寝坊した男、そして将来の妻となる女性など多種多様である。自身の仕事が向いていないのではないかと悩みながらも、拓志は乗客一人一人に対して真摯に向き合い、助けていく。その姿に時に苛立ち、叱咤するタクシーであったが、彼を傍で支え続けたのもまたタクシーだった。運転手と意志を持つタクシーという、一風変わった関係性を持つ彼らだ

が、多くの経験を通して互いに支え合い成長していく様子が描かれていた。

やがて月日は流れ、拓志の娘「紗耶香」が夢を追いかけて進路を選ぼうとする中で、拓志自身もまた一度諦めた自らの夢について考えを巡らせる。夢が叶えば幸せなのか、夢が叶わなければ不幸せなのか、そして今自分は本当に幸せなのか。「寄り道、回り道があってもいい」・・・劇中で語られるこのセリフは、夢と現実の間で葛藤する拓志や紗耶香だけでなく、私たちにも強く響く言葉であった。人生にはさまざまな出会いと別れ、そして選択があり、その選択によって未来は変わる。夢が叶わなかった先で見つけた幸せに気づいた拓志の背中が穏やかで、ただ前を向いていた。



諦めた夢とその先の幸せについて、人間関係を丁寧に描く一方で、劇中にはコミカルな要素も散りばめられていた。変幻自在な車体や軽妙な会話はテンポが良く、全体的に明るく愉快的な雰囲気を生み出していた。特に拓志とタクシーとのやりとりは生き生きとしており、互いへの深い信頼が伝わるとともに、彼らの別れの切なさや未来への希望がより一層胸に染み渡った。

タクシーという存在だからこそ生まれた物語。タクシーがいたからこそ形作られた拓志の人生。本作品は改めて、「拓志」と「タクシー」の絆と成長の物語であった。